

令和3年度

# 近畿大学附属小学校 学校評価 総括



## 近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

## 2021年度 教育方針など

建学の精神の具現化  
高い進路保障  
智・徳・体の健全な育成  
経営状況の健全化

### 1. 私立小学校、私立幼稚園としての付加価値を高める

#### 【教員】

- ・私立学校の教員に相応しい言葉遣い、身だしなみ、態度、品位などを常に意識する
- ・質の高い授業、保育を提供する
- ・私立中学校の入試問題を分かりやすく解説できるスキルを身につける

#### 【教育内容】

- ・ICTを利活用した新しい授業の構築
- ・4技能が身につく英語教育
- ・楽しみで待ち遠しく感じる行事
- ・あいさつ、返事、履き物を揃えるなどの基本的な生活習慣を身につける
- ・思いやりのある子、一隅を照らす人を育てる

### 2. 学力を保障する

#### 【授業の主眼】

- ・中学校の授業を十分理解できる基礎学力、語彙力を確実に養う
- ・全員が学力テストで80点以上得点できること 再テストの実施。理解不足を補う対応

#### 【授業の改善】

- ・知的好奇心を刺激する授業
- ・理解力に応じた個別対応の課題など  
ICTの活用、通塾児童も退屈しない工夫

### 3. 課題を把握し、共有する

- ・幼小の連携を緊密にすること
- ・近小ゼミに代わる新しい学習サポート
- ・低学力者、課題未提出者への適切な対応
- ・附属中学校推薦制度に基礎学力の目安を設けることを検討する  
小学校内部の規定として

### 4. 学校評価について

#### (1) 学校評価の種類

自己評価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケート・保教会運営委員アンケートによる結果（10月・2月実施）

学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園教頭、近友会会長、保教会会長、校長、教頭、教務部長により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。（通常11月・3月の2回実施）

#### (2) 評価基準

- S：目標を上回って達成した（5.0～4.5） A：目標どおり達成した（4.4～3.8）  
B：取り組んだが達成できなかった（3.7～3.1）  
C：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった（3.0以下）

### (3) 自己評価について

#### ① 教職員による評価

<p>1. 学校経営の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <p>○ 開かれた、信頼される学校づくりを進めるため、学校として、あるいは、学年やクラスとして抱えている課題に対し、組織的な学校運営を行う。</p> <p>○ 教育活動を広く公開、発信していくことで、在校生保護者との信頼関係づくりに努める一方、開かれた学校づくりを通して、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。</p> <p>○ 学校をあげていじめの未然防止に努め、いじめの早期発見と、組織的な事案対処を行う。</p>		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 組織運営	初期対応に重点を置き、教頭、学年主事、学年主任と連携を深め組織的な対応を行う。学年会、学年主任会を有効に活用し、必要に応じて柔軟に話し合いの機会を持つ。「報告・連絡・相談」を組織的に行う。	A
③ 情報の発信・児童募集活動	「開かれた信頼される学校づくり」の実現のため、学級通信、「きんちゃんしょうちゃん日記」等を通じて、家庭や入学希望者への情報発信をすると共に、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。	A
② いじめ対策	いじめが起きにくい環境、いじめを許さない環境づくりに努め、事案に際し、迅速な組織対応を行う。必要に応じてアンケートや個人面談・保護者面談の実施する。	A
結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点		
<p>① ほぼ全員が[担任-学年主任-学年主事-教頭]と連携をとって教育活動を実施されてきたことを成果としてあげていた。情報を学年内で共有することが当たり前という雰囲気が、問題を抱え込まないことにつながっている。学年会だけでなく、放課後の職員室での情報共有や、Slack の活用が良い例として挙げていた。組織的な対応という面で、コロナ禍の急な変更が多い中で、学年に任される部分が多くなり、これが組織的であったかどうか、という点への指摘もあった。</p> <p>② 「きんちゃんしょうちゃん日記」を分担して継続できた。外部からの評価もあり、児童募集につながっている。学級通信については、コロナ禍の中、来校できない保護者に好評を得られている。無理のない形で今後も続けていく必要がある。ただ、保護者の要求がエスカレートしていくことに不安の意見もある。そもそもは、日頃の教育活動が口コミで広がっていくことが大変重要であり、教員が真摯に教育活動に向かっているその姿がそのまま児童募集につながっている。私学として、選ばれる学校であり続けるために、教員一人一人の力をこれからも発揮していかなければならない。</p> <p>③ 未然に防ぐ手立て（教員の「いじめを許さない」という姿勢、いじめが起きにくい環境づくり、相談があったときの丁寧で迅速な対応、多くの目で見守る）、実態の調査（アンケートの実施、Q-U、HUMAN の実施と結果の考察）などから、いじめを「芽」の段階で摘むことができています。複数の教員が「言葉遣い」に着目している。専科担当者、担任との情報の共有を重視しており、今後も継続していくことが重要である。ただ、児童の特性に応じた個別対応が求められるようになり、これは今後増えていく可能性がある。組織的な対応を心がけ、担任一人で抱え込むことのないよう気をつけていく必要がある。</p>		
<p>2. 学習指導・研修の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <p>○ 本校児童の学力を保障するために、基礎学力の定着と学力の向上にかかわる具体的な取り組みを検討・実施する。</p> <p>○ 私立学校としての付加価値を高めるため、これまでの取り組みを発展させ、「新しい授業」の構築を目指した取り組みを検討・実施する。</p> <p>○ 私立学校の教員としての誇りと自覚をもち、指導力を向上させ積極的な教育活動を行うために各種研修を充実させ、これまでの取り組みを向上させるための自己研鑽を行う。</p>		

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 基礎学力の定着と学力の向上	○ 学年会で検討した学習習慣の定着と学力向上のための取り組みを実践し、教科部会での検証、国語科・算数科の研修を実施し、学力テストに向けての取り組みの実践を構築する。	B
② 「新しい授業」の構築	○ 4技能が身につく英語教育を実践するとともに、ICTの利活用による新しい授業を実践する。併せて、プログラミング教育を実践し、デジタルシティズンシップ教育について検討し、研究教科での学力を検証する。	B
③ 近小の教員としての教員研修	○ 学年会・教科部会による学力向上のための話し合いや、新任新採用者研修・国語科と算数科の研修・若手研修会を充実させる。外部の研修会への積極的な参加（リモートを含む）や私立学校の教員としての誇りと自覚をもち、指導力を向上させ積極的な教育活動を行うために各種研修を充実させたり、これまでの取り組みを向上させたりするための自己研鑽を行う。	B

結果と分析・次年度への改善点

① 中間まとめから引き続き、全ての教員が高い意識で基礎学力定着・学力向上のための指導と取り組みを継続していることが分かった。全体として以下のようなスパイラルの取り組みが多く、その成果と課題も挙げられていた。

(学力の見取り) (向上のための取り組み) (成果の確認)

授業中に見取りや小テスト ⇒ 休み時間や放課後の学習支援 ⇒ テストによる到達の確認

② それぞれの学年で iPad を使用する頻度や機会が大幅に増え、教員の努力により、教員・児童ともに iPad を活用する技能が向上していることが分かった。しかし、それらの取り組みが学力向上や系統的な指導、「新しい授業」の構築につながっているかという点では、「試行錯誤の段階」であったというのが現状であり、「新しい授業」の全体計画・系統的な指導計画の作成等が、今後の課題である。また、iPad の管理整備等、それらを支えていくサポート態勢も学校全体で整えていく必要がある。

③ コロナ禍の影響もあり校外の研修に積極的に参加することは難しかったが、オンラインを活用した研修等を通して、各自の課題をもって研修研鑽に努めていたことが分かった。しかし、校内研修については十分に行うことができていないとの反省もあり、校内の課題を教員間で共有した上で研修に取り組むこと等、研修の在り方を含め、教育研究部の今後の課題とする。若手研修会について、「勉強になった」「回数を増やしたり、継続して行ったりしてほしい」といった意見が複数あった。「算数 Labo」のような若手の取り組みを積極的に応援したいという意見も複数あった。

英語科の取り組みについては、近小タイムを活用し担任と連携しながら、英語のモジュール学習を進めることができた。TOEFL Primary については、計画通りに2回受検することができた。今年度の結果をふまえ、さらに4技能の力をのぼせるように学習計画を立てたい。ICT を活用し英語をインプットするだけでなくアウトプットする場を多く設けることができた。

3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点

(1) 目標

- 規範意識を育成し、高めていくため徹底した指導を行う。
- 子供たち自らが諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。また、異年齢交流を深め、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる。
- 子供たちの心身の健康を中心に、安心、安全を考慮した集会や活動を計画し、実施する。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 生活指導と安全	挨拶、身だしなみ、登下校マナーの徹底指導をしていく。安全な教室、環境づくりを行う。	B
② 児童活動	新しい生活様式を踏まえた集会や異年齢の交流活動（フロア活動、クラブ、委員会など）を計画し、工夫して実施する。	B
③ 保健衛生と体育	怪我予防や熱中症、感染症（特に新型コロナウイルス感染症）等の予防や対策を実施していく。	A

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

① 生活指導と安全

4月から挨拶、身だしなみ、登下校のマナーをなどあらゆる場面で指導を行ったが、指導の結果としてはそれぞれ「目指しているレベルまでの達成ができていない」や「児童自身の意識がそれほどまでに高まっていない」などの声が多くもあり、大きな課題として残った。挨拶に関して・・・教員の率先垂範を進めている。挨拶をすれば返ってくるが自分からできる児童が少ない。身だしなみに関して・・・帽子をかぶっていない児童が多くなってきている。登下校に関して・・・以前より電車内では本を読み静かに過ごしている児童が増えたという声がある一方、苦情の件数もあり改善までに至っていなかったという声があった。中には、駅や車内での指導を通して、大人が見ている場面だけでなく、自分たちでマナーを守る意識を培わなければならないとの意見もあった。

今後の指導として、保護者への啓発や協力体制も必要ではないかとの声もいくつかあった。今後も児童への指導を工夫し、声かけや働きかけを継続していくこと、今年度行った「生活目標」などの新たな指導の形が必要であるとの指摘が多かった。

② 児童活動

今年度多くの行事や異学年交流が思うようにできなかったという声が多かった。コロナ禍のため制約・制限が多い中でも、行事の企画・立案を進めたり、工夫し、形を変えて実施したりして、実施できた行事もあり、子供たちも喜んでいたという声があった。また、ZOOMを活用した異学年交流、集会などオンラインならではの活動を実施することができ、厳しい状況のなかであった異学年での交流を進めることに努めた。子供たちの学びや交流を止めないという教員の思いや姿勢が表れていた。今後の状況にもよるが、今後は幼稚園などとの交流やフロアの交流も充実できればとの声も多かった。

③ 保健衛生と体育

今年度も手洗い、手指消毒、換気や黙食の徹底などコロナ感染症対策に注力した。子供たちも自然と感染予防を意識した行動が習慣となってきたという声が多かった。今後も引き続いて感染症対策に努めたい。

4. 進路指導・学習評価の重点

(1) 目 標

- 個々の学力推移を的確に把握し、進路に対する保護者の意向や子供の思いを尊重しながら進路指導を進めていく。
- 何事にも元気に真面目に頑張る態度を身につけさせ、附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける人物を育成していく。
- 卒業生による進路学習を充実していく。

評 価 項 目	取 り 組 む 内 容 ( 指 針 )	達 成 状 況
① 適切な進路指導	進路指導部から作成される学力推移表や日々の学習記録をもとに、低学力層の基礎学力を身に付けさせる。	B
② 進路保障 (内部進学)	附属中学校に推薦できる学力や学習姿勢を身に付けさせる。	B
③ 進路学習の充実	進路指導部で企画する進路学習を含め、子供たち一人一人が将来の夢や自分のなりたいことを語るができるような取り組みを実践していく。	B

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

① 個々の学習状況の把握に努め、必要に応じて補充学習等を取り入れた。特に、進路指導部から出される学力推移表をもとに、学力に課題のある子供に向けての指導を重点的に行うことができた。個々の教員の授業力の改善を意識した指導が展開された。その結果、年度末に実施した学力考査の経年比較について、低学年においては改善傾向となった。しかしながら、高学年においては依然大きな課題を残しているため、早急に改善策を検討している。

③ 近小キャリアパスポートを用いて、自尊心を高めるとともに、発達段階に応じて自分の将来像を考えさせる機会をつくることができた。また、卒業生による進路学習を実施できた。子供たちの感想文からわかるように、自分の将来の姿を追い求めていこうとする原動力となった子が数多くいた。

## (2) 児童アンケートの考察

子供たちの『振り返りシート』には、非常に制限された中にも関わらず、様々な活動や体験を通して、「一所懸命頑張った」「こつこつ取り組んできたので、こんな事ができるようになって嬉しい」といった肯定的な自己評価が多く、不自由な中、子供たちが学校生活を満喫している姿が伝わってきて、教職員の意欲が一層喚起された。「丁寧な言葉遣いを心掛けている」については、子供たちはできていないという自覚を持っていることから、さらに指導を充実させて、実践につながるようにする必要があると反省している。

## (3) 保護者アンケートの考察

### ● 学校の教育方針について

おおむね、本校の教育方針にご賛同いただき、引き続き、叡智教育（知育）道徳教育（徳育）健康教育（体育）の調和の取れた教育の充実に向けて努めていく。特に、学舎・学習旅行については、中止へのお叱りを数多く受けた。本校教育の根幹にかかわる重要なことでもあり、来年度の実施に向けて準備を進めていく。

### ● コロナ禍の教育活動について

予防的措置をはじめとした本校の取り組みについて、賛否両論の意見を頂いた。本校としては、子供たちの安心・安全を第一として取り組みを進めてきたが、結果的に、心配をかけてしまうことになってしまい、反省している。

#### ・ ICT教育について

他校よりICT教育への取り組みが先行していたにもかかわらず、つながりが悪いなど、十分に対応し切れていなかったと反省している。Wi-fi環境の脆弱さをはじめとした環境の整備について業者による改善を進めていく。

#### ・ 授業時数について

分散登校、午前中のみ授業等、授業時数の確保が大変難しい状況が続き、保護者のみならず、子供たちにも多大な心配をかけることになってしまった。1年生～5年生については、引き継ぎを確実にやり、次年度に無理なく接続させる。6年生については、教科書の内容は既に指導済みであり、現在、学習の総まとめ及び中学校の学習への準備を進めている。

#### ・ 生活指導について

乗車マナーをはじめとした公共マナーの徹底に努めているところであるが、乗客や地域住民の方からの苦情が多く寄せられているのが現状である。特に、行事の際の近隣での駐車について厳しい非難が寄せられている。今後とも各家庭の協力を得ながら改善に努めていく必要がある。

#### ・ 安全指導について

子供向け携帯電話については、許可書の提出に基づき、登録の上使用を認めている。併せて、子供向け携帯電話の使用を推奨していく。

### ● ケータリング給食について

「回数を増やして欲しい」「選択制にして欲しい」「より美味しいケータリング給食になるようにして欲しい」等々数多くの意見を頂いた。『ケータリング給食』についての授業を実施する等、食育とも関連させ指導を進めていく。業者とも連携・調整を図り、より充実したケータリング給食が実施できるように改善を進めていく。

### ● 進路・進学指導について

進路・進学についての情報開示を一層進めるとともに、進路説明会の充実に向けて努める。来年度より『近小ゼミ』を発展・解消させて『近小ゼミ+』を実施する。

### ● 学級や授業について

既に周知しているとおり、来年度より、教科担任制を4年生から実施し、授業の充実を図るとともに、学級差が生じないように、学年としての取り組みを進めていく。

#### (4) 保教会運営委員アンケートの考察

昨年同様、本年度も、コロナ禍のため、保教会運営委員の皆様に対するアンケートを残念ながら実施することができなかった。

### 5. 学校関係者評価について

#### (1) 本年度の教育活動についての概括

校長から冒頭、コロナ禍の教育活動について、学びの環境を整えることに専念した1年であったと総括した。これを受けて教頭が、「学校アンケート」の結果から、子供自身に言葉遣いや登下校マナーが悪いという自覚がある。教員も同じ理解であり、早急に実践化していく必要がある。「チーム学校」、「チーム学年」としての取り組みはうまく進めることができている。コロナ禍への対策は否定的な意見もあったが、医療系の保護者からの評価は高く、おおむね理解を得られた。ICTについては、Zoomで授業を流すだけの授業は実施していない。Wi-Fi環境の弱さはあったものの、円滑に進められるように努めている。授業時数の足りないところや未習内容は、今後もフォローアップに努め、新学年に無理なく接続させていく。保護者来校時の駐停車については、一部の保護者に限られるが改善されないため、引き続き啓発していきたい。衛生管理・安全管理についても徹底していく。新しく附属中学校進学に向けた「近小ゼミ+」の取り組みを開始する。低学年では学力低位の子供に対してピンポイントの個別指導を行いボトムアップを図っている。附属中学校への内部進学に向けては学力、行動の両面を見ていく。学力については年度末のテストで経年比較について考察している。ICTを活用し、学力に歯止めをかけている最中であると説明した。

#### (2) コロナ禍におけ蹴る教育活動について

附属中学校・高等学校長より、コロナ禍の教育活動については、中高でも共通した課題である。学校側が決断し、異論があった場合にはていねいに説明する。出停中の授業をどうするか、保護者からの要望は多々あった。その結果、学力の高い生徒数名が「自分のペースで学習できる」と転出した。学費を抑え、その費用で留学の道を選んだ。学校は、対面で授業を受けることの価値や、みんなで学ぶことの価値を伝える必要があり、生徒から見ても魅力がある授業をしていかねばならない。もう元へは戻らない。クラブや行事だけでは魅力は足りない。平時のICT活用、授業のあり方をどうするのか。公立はまだICTが入っただけで、中身は空っぽかもしれないが、やがて一気に進む。質の高いICT活用を進めないと私学の存在が危うい。「N高」などのシステムはよく考えられている。自由度が高く、自分なりのカスタマイズができる。そのシステムとは違う価値を打ち出さないと私立は生き残れない。全日制の学校の存在そのものが問われているとの指摘を頂いた。これに対しては、本校教育の根幹である学舎・学習旅行を中止にしてしまったことに対してのお叱りの声が大変多かったこと。行事を核にした取り組みや、今まで中止になった行事の実施に取り組んでいくことで、附属中学校・高等学校長の指摘に答えていきたいと説明し、了承を得た。

#### (3) ICT教育の推進について

ICTについては、アナログとデジタルの両立ならびに、ハイブリット型ノートを進めていくこと。「学校へ来ると楽しい」という想いを強く引き出せるように、指導の改善を進めていくこと。併せて、タブレットは多機能の文具として、低学年の頃から使用させていくことと、多機能の文房具として低学年のころから使っていきたい旨説明した。これに対して、子供は新しいものに直ぐに興味を示す。学習ツールとして、とても興味を持っている。附属高校でiPadを導入した1期生が、教員として戻ってきた。教育実習でもiPadの授業を知っている学生が戻ってくる。とても使い慣れている。いよいよ、ICT教育を受けた世代が教育を担う時代がやってきたとの指摘があった。併せて、タブレットの導入については、学校でそろえて買う方が良いのか、個人で買う方が良いのか、保険の件もあり、保護者は判断しにくいのではないか、何か保護者からの質問や意見はないのかとの指

摘があった。特に学校として把握していないが、学校で購入するとお考えの方が多いと推測されること。学校購入でなくてもよい、と伝えてもいること。原則、学校での購入をすすめているが、いろいろなパターンを受け入れる方向で進めていきたいと説明した。個人で購入したタブレットも、学校仕様にキティングされると学校管理のものとなるため、Appleなどから、機器をレンタルしてもらうことはできないのか？との指摘に対して、今は過渡期であり、いろいろな意見をいただくなかで改善を進めていきたいと説明した。これに対して、ハイブリッド型ノートの話聞いて安心した。ICT教育で学力が上がったとしても、社会に出たらどうなのか、幼小9年間で身に付けるもの、根っこになる部分を大切にしてほしい。一番大切な時期であり、アナログを捨ててほしくない。将来つぶれる子もいる。社会に出て能力を発揮できる教育の充実を図ってほしいとの指摘がなされた。これに対して、タブレットはあくまでツールであることを忘れてはならないこと。タブレットの活用を段階的にマニュアル化しようとする学校もあるが、本校はそうではなく、トライ&エラーをくり返すことで使いこなすことができるよう配慮していること。授業は様変わりしたところもあるが、学校での子供たちの姿は変わっていないこと。走り回って遊んでいると説明した。これに対して、子供自身もやがて自分で選んでいく。その前の土台づくりが大切ではないかと指摘された。「N高」「N中」はあっても、恐らく「N小」は出てこないだろう。このままでいくと「学校はいらないかも」ということに気付く。学校は午前中で終わって午後からは自由、という発想も出てくるだろう。でも、小学校では、それではいけないということにこのコロナ禍で強く感じさせられた。コロナ禍の学校生活では、もめごとや怪我が減った。限られた条件の中で工夫した取り組みが行われ、日帰りの修学旅行や学年ごとの近小フェスティバルなどを工夫して実施したところ、子供たちは「楽しかった」と喜んでいて。子供たちは、生でふれあうことを望んでいると感じている。デジタルばかりにならぬよう、大切なことは動かさないようにしながら、時代の流れも大切にしていきたい。来年度116人という定員に近い数の入学者となったが、少子化や経済的な問題、コロナなど、県内の私学はどこも厳しい状況である。近畿大学や附属高校、中学校のおかげでキープできているところもある。あいさつや思いやりを大切に、特別な子供達を預かっているという自覚をもって、教育活動を進めていきたいと説明し、了承を得た。

以上、本年度の教育活動についておおむね了承が得られた。引き続き、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼稚園との一貫教育に基づく教育活動を展開するとともに、附属中学校・高等学校、大学との連携を深めていくことで、私学としての質の高い教育を提供し、児童や保護者の信頼や期待に応えられるよう教育改善を進めていく。



近畿大学附属小学校  
KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL